

# 理想の家庭の転覆

—— 『ねじの回転』におけるガバネスに関する一考察——

石 井 麻璃絵

## Summary

Henry James' *The Turn of the Screw* (1898) illustrates a nameless governess's struggle to protect her pupils from the ghosts that try to haunt them. Her trial seems to show the nineteenth century British society's inclination for a woman to be the guardian angel of the house. Victorian authors preferred to depict poor governesses, nurses, and companions as being warmly welcomed into the house as new middle-class family members when they succeeded in showing the possibility of their becoming a domestic wife. Only women who properly follow gender norms are given a happy ending. This paper aims to explore the role of the governess in *The Turn of the Screw*. In the end the nameless heroine fails to purify a country house, Bly Manor, and this implies that she is expelled from the middle-class domestic space as a useless outsider. In fact, however, *The Turn of the Screw* does not praise the Victorian domestic ideal but rather subverts it. In Bly Manor, the heroine finds that the children are not as pure as the domestic ideology claims. In addition, the master of the house not only refuses to protect his family but also courts danger there. In conclusion, the author argues that by illustrating a house that is far from the ideal 'home' and a woman who has not succumbed to the traditional gender role the domestic ideal is merely a myth.

**Keywords:** governess, ghost, odd woman, Gothic Romance, child as innocent

## 序章

ヘンリー・ジェイムズ (1843-1916) の『ねじの回転 (*The Turn of the Screw*)』(1898) は

屋敷に集まった紳士淑女が怪談話を披露し合うシーンから始まる。一つの話が終わった後、ダグラスという初老の紳士がかつて妹のガバネス（家庭教師）をしていた女性が体験した恐ろしい話をしようとする。彼女はすでに亡くなっているがその時の体験を原稿に残しており、ダグラスは屋敷に原稿を取り寄せることができるという。彼がこの話をするのは実に40年の沈黙を守った後であり、興味を引かれた客人たちは屋敷の滞在期間を延ばして彼が話し始めるのを待つ。この冒頭シーンは、まるで湖畔の屋敷に集まったジョージ・バイロン、パーシー・シェリー、メアリー・シェリーが一つずつ怪談話を書き合い、メアリーによる『フランケンシュタイン』（1818）が誕生した時の様子を想起させる。

イギリスでは18世紀後半から19世紀初頭にかけて、幽霊や超自然現象を扱うゴシック・ロマンスが流行した。女性ゴシックの祖とされるアン・ラドクリフの作品を初め、特に好んで描かれたのは日く付きの屋敷で女性が恐怖体験をするというものである。その後、文学思潮がリアリズムに移行すると、ゴシック・ロマンスはしばしば荒唐無稽な想像力をかき立てる二流文学として侮蔑された。しかし、ブロンテ姉妹やウィルキー・コリンズ、チャールズ・ディケンズなどイギリスの大御所の作家たちは頻繁にゴシック・ロマンスの常套句となるプロットや要素を小説に取り込み、想像力豊かで深みのある作品をいくつも輩出してきた。ヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』もまたそうした作品の一つであり、後の推理小説や心理小説に大きく影響を与えている。

『ねじの回転』が描くのは、子供に取り憑く幽霊の話である。ヒロインであるガバネスは金持ちの紳士から彼の甥と姪の面倒を田舎の邸宅で見よう依頼される<sup>1)</sup>。しかし、屋敷には彼らの死んだかつてのガバネスと、彼女と関係を持っていた下男の幽霊がさまよっている。不思議なことに、幽霊の存在はヒロインによってのみ目撃される。彼女は子供たちにもそれが見えていることを確信しているが彼らはそれを否定し、また、他の従業員も幽霊を認知することはできない。このことから批評家たちは長らく幽霊をガバネスであるヒロインが見た幻覚として解釈し、彼女の精神面に注目してきた（Briefel 159）。結婚をして妻、母になることだけが女性の唯一正しい生き方とされた社会において、ヒロインは当時「余った女性（odd women）」と呼ばれた苦境に立つ女性である。そのため Aviva Briefel や Peter G. Beidler などによって、幽霊の正体は未婚女性の精神的苦痛や狂気、性的抑圧として考察されてきた。しかし、『ねじの回転』におけるガバネスは必ずしも社会的弱者としてだけ描かれているわけではない。男主人、そして女主人が揃って不在の屋敷において、彼女はもっとも権力をもつ人間となり、子供たちを幽霊から守るために立ち上がる。本論は、幽霊の存在によって示されるミドルクラスの「家庭の理想（domestic ideal）」の欺瞞と、「家庭」におけるガバネスの役割について考察する。

19世紀は人々の家庭への関心が高まった時代である。産業革命を背景に男性が働き、戦

う外の世界が悪徳と結びつく空間と考えられる一方、家は女性を中心とした家族の安全やプライベートな生活を守る場所として賛美された。『ねじの回転』ではそうした理想の家庭像を作り出す家庭的な女性や純粹無垢な子供の姿が不在であり、逆にミドルクラスの家庭の「他者 (the others)」として描かれてきたガバネスが家の中心的な役割を担う。本論の目的は、『ねじの回転』に見られるこうした理想の家庭像の欺瞞に注目し、難解な本書を読み解くことである。

## 一章：理想の子供像の失墜

ダグラスの導入部以降、物語はガバネスであるヒロインの一人称視点で語られる。彼女はハンブシャーの貧しい牧師の末娘で、20歳になったときガバネスになるため単身ロンドンにやってくる。彼女の雇い主となる男性は豪壮大邸宅に住む若い独身紳士で、彼女を優しく屋敷に迎え入れる。そこで彼は10歳の甥マイルズと8歳になる姪フローラのガバネスとして、サセックスの田舎にあるプライ館で彼女に働いて欲しい旨を話す。子供たちの父親であり紳士の弟に当たる男性は陸軍軍人で、妻と共に2年前に亡くなっている。他に親戚がいなかったことから紳士は子供たちを引き取るが、独身男性にとって子供の面倒を見ることは「思いもよらない出来事 (the strangest chances)」(*The Turn of the Screw* 149 以下 TS) だった。館には女中頭であるグロース夫人の他に多くの有能な使用人たちがいるが、仕事を引き受ければガバネスであるヒロインは依頼人の甥と姪を除いて一番の権力者となる。与えられる給金もかなりいい。地元の牧師館から出たばかりの「若くて、未経験な (young, untried)」(TS 150) ヒロインにとってこれは「重大な任務 (serious duties)」である。さらに、紳士は仕事を一度引き受けたら、それ以降いかなることがあっても自分を煩わすような事はせず、彼女自身で全ての問題を処理することを約束させる。彼女は大いに戸惑うものの、最終的には優しい紳士を助きたい気持ちになり依頼を引き受ける。

こうして、ヒロインは雇い主のいない田舎の屋敷で子供たちの面倒を見るという変わった境遇におかれることになる。当初、彼女はこの生活を「少人数の、実に寂しい生活 (a vision of ... little company, of really great loneliness)」(TS 150) になるだろうと予測する。また、館に向かう道中では疑念に駆られ、仕事を引き受けたのは失敗だったのではないかと後悔し始める。しかし、見えてきた美しい建物と、彼女が面倒を見ることになる少女の愛らしい様子に疑念は一掃される。広く荘厳な館の正面玄関で、彼女はフローラとグロース夫人を迎えられる。フローラは「天使のような美しさ (angelic beauty)」(TS 153) をもつ少女で、踊るような足取りでヒロインにプライ館を案内する。数多くの美しい部屋、奇妙なねじくれた階段、目もくらしそうな古いはね出し狭間つきの四角い塔など、不思議な空間をもつ建物は彼

女の目に「ばら色の妖精がすむロマンスの城 (a castle of romance inhabited by a rosy sprite)」(TS 155) のように映る。さらに、学校から帰ってきたもう一人の生徒マイルズも素晴らしい少年だった。フローラ同様、彼の全身は「輝かしい新鮮さ (the great glory of freshness)」(TS 161) と「純潔な香気 (the positive fragrance of purity)」に包まれ、その顔にはかつてどんな子供にもない「神々しいもの (something divine)」がある。彼女はすぐに「このうえなく美しい (incredibly beautiful)」(TS 161) 二人に魅了され、また、同僚となる心優しいグロース夫人の人柄にも助けられて順調に仕事を始める。

フローラとマイルズは当時の社会が理想と掲げた子供像そのものだろう。ウィリアム・ブレイクやウィリアム・ワーズワースなど、ロマン派の詩で描かれる少年少女は「無垢 (innocence)」や「善良さ (goodness)」の化身であり、理性ある大人が守るべき弱々しい姿で登場する (Allison and Adrian 53)。『ねじの回転』のヒロインもまた、フローラとマイルズを「倫理上はともかくも、非難するものは何もない (略)、まるで微かな過去だとさえ呼べるものを一つも持たない天使 (cherubs... who had—morally at any rate—nothing to whack! ... as if [they] had had, as it were, nothing to call even an infinitesimal history)」(TS 168) と見なし、彼らを幸福で有益な人生を送れる人間に育て上げることこそが自分の使命であると考えている。しかし、この原稿を書くヒロイン、「年齢もまし、知識もある (older and more informed)」(TS 155) 初老の女性になった彼女は彼らの見目が「罠 (a trap)」(162) であったと打ち明ける。ある日、マイルズの学校の校長から手紙を受け取った彼女は、マイルズが「他の生徒たちの害になり (he's an injury to the others)」(TS 158)、人を「墮落させる (contaminate)」(159) という理由で退学になることを知らされる。当初、彼女はこれを濡れ衣と考えるが、後にそれが間違いであったことを認める。また、原稿を書くヒロインは現在の目で見れば屋敷自体もずいぶん値打ちが下がり、不気味な雰囲気を漂わせていたと。

いいえ。あれは大きくて不格好で古めかしい、けれど半ば取り替えられて使用されている古い部分の特徴付けた、便利な家なのだ。そのなかで、私は漂流している大きな船に残された一握りの乗客たちと同じほど自分たちがさ迷っているような空想に駆られる。しかも奇妙なことに、舵を握っているのは私なのだ。

No; it was a big, ugly, antique, but convenient house, embodying a few features of a building still older, half-replaced and half-utilized, in which I had the fancy of our being almost as lost as a handful of passengers in a great drifting ship. Well, I was strangely at the helm. (TS 156)

古い部分と新しい部分という正反対の性質が歪に混ざり合う館は、あたかも不安定に漂流する船のようである。世間から隔離されたこの館で、ヒロインは徐々に明かされていく住人

の事実一人立ち向かうことになる。

『ねじの回転』に描かれるもっとも深刻な恐怖は、純粹無垢と思われた子供たちが悪徳に染まっていることである。家政婦頭であるグロス夫人の話から彼らに影響を与えたとされる下男クイントと、彼によって破滅させられた前のガバネス、ジェスルの人物像が見えてくる。クイントはかつて主人付きの従者で、ブライ館の管理を任されていた。彼はハンサムだが「利口で腹黒い (so clever... so deep)」(TS 178) 男だった。彼は「慎みがなく、誰に対しても無遠慮 (was much too free... too free with everyone)」(177) で、主人のいない館で全ての人間を言いなりにしていた。しかし、ある冬の明け方、彼は村に通じる道路で遺体となって発見される。頭部には傷があり、事件は居酒屋で飲んだ彼が道を間違えて凍り付いた傾斜から滑落したものと片付けられた。しかし、クイントの背後には「いろいろ不可思議な事件や危険、秘密の乱交、悪徳 (strange passages and perils, secret of disorders, vices)」(TS 179) など不明瞭な点がいくつも挙がり、死の真相は怪しいままとなった。

また、ジェスルもこの頃、同じように若くして亡くなっている。グロス夫人はジェスルを「レディーだった (she was a lady)」(TS 185) と表現する一方、「破廉恥 (infamous)」(184) だったと罵る。死因ははっきりと述べられていないが、グロス夫人がジェスルを「気の毒な女 (poor woman)」(TS 185) と呼び、その死を「報いを受けた (she paid for it)」と表現していることから、ジェスルはおそらくクイントとの間に子供を身ごもり、それが理由で落ちぶれた、もしくはお産によって亡くなったことが考えられる (また、ジェスルの霊が頻繁に湖付近で現れることから、入水自殺をしたことも考えられる)。

身分違いでありながらクイントはマイルズの「大先生 (a very grand tutor)」(TS 190) 気取りで、何時間も屋敷の外に連れ出して帰ってこないことが頻繁にあった。ジェスルもまたフローラ専用のガバネスとして二人は常に一緒にいた。こうした話をグロス夫人から聞いたヒロインは、クイントとジェスルがマイルズとフローラに与えた「影響 (effects)」(TS 178) を懸念する。ここで彼女が言う影響とは、具体的には性の知識を指している。Eve M. Lynch など、多くの批評家が『ねじの回転』で示唆される性的メタファーを指摘する。特に注目されるのが、男性器の象徴として考察される、クイントの幽霊が現れる屋敷の塔である (Lynch 15)。ある日、屋敷の外を散歩していたヒロインは塔の上に知らない男が立っているのを目撃する。この人物が現れた途端、周囲からあらゆる物音が消え失せ、辺りは一瞬にして「死に襲われた場所 (the scene had been stricken with death)」(TS 164) になる。男は彼女を睨みつけると徐々に移動し、そして見えなくなった。男がクイントの幽霊であったことを知ったヒロインは後日、マイルズが夜中に部屋から抜けだし、塔の上にいるクイントの幽霊と交信しようとしているのを目撃する。

クイントがマイルズを自分と同じ悪の道に誘い込もうとするように、ジェスルはフローラ

の前に現れる。ある日、ヒロインはジェスルの霊が後悔と絶望にさいなまれた哀れな姿で教室に座っているのを目撃する。そして別の日、ジェスルの幽霊は庭で遊ぶフローラの側に現れる。この時、ヒロインはフローラが幽霊を目撃していながら見えないふりをしていることに気が付く。衝撃を受けた彼女はグロス夫人に、「私、もう子供を守ったり、救ったりしないわ！ 私の思っていたより、ずっとずっとひどいんですもの。子供たちは失われた！（I don't save or shield them! It's far worse than I dreamed. They're lost!）」(TS 186) と叫ぶ。この台詞は、子供たちが幽霊の存在を知っていたことを指すものにしては、いささか大げさに思われる。Kathy Justice Gentile はヒロインが頻繁に口にするマイルズとフローラは「知っている (they know)」という言葉が、子供たちが性的な知識を持っていたことを指すものと解釈し、マイルズとフローラがクイントとジェスルの肉体関係を目撃していた可能性をほのめかず (Gentile 99)。二人について言葉を濁すグロス夫人からうかがえるように、クイントとジェスルは性的に墮落した人間であり、その二人ともっとも時間をすごしたマイルズとフローラは、すでにその毒牙にかかっている可能性がある。ヒロインの叫びは純粹無垢であるべき子供たちが汚されたことに対する衝撃であり、理想の子供像が崩壊する事に対する叫びなのである。

事態を悪化させるのは幽霊が子供たちに近づこうとするだけでなく、子供たちもまた彼らに惹かれ、接近しようとしていることである。ヒロインはマイルズとフローラがしばしば監視の目をくぐり、幽霊が出没するとされる場所に向かっているのを感じ取る。少しずつ彼らへの考えを改めていくヒロインは、やがて彼らが普段から巧みに演技をしている可能性に気が付き始める。マイルズとフローラは何をしても申し分のない、才能豊かな子供であるが、なかでも彼らが得意なのが物真似である。

彼らがますますよく勉強するようになるのは、もちろん気の毒な保護者としての私にとって一番嬉しいことだったが、彼らは気晴らしの折に私を楽しませ、驚かせてくれた。彼らは詩の一節を読み、物語を話し、シャレード (ジェスチャーゲーム) をして、動物や歴史上の人物に扮して飛び出して私を驚かした。とりわけ彼らが秘かに作品を暗唱し、長々と朗吟するのに仰天させられた。彼らは虎やローマ人だけでなく、シェークスピアや天文学者や航海士となって突然私の前に現れた。

I mean—though they got their lessons better and better, which was naturally what would please her [poor protectress] most—in the way of diverting, entertaining, surprising her; reading her passages, telling her stories, acting her charades, pouncing out at her, in disguises, as animals and historical characters, and above all astonishing her by the ‘pieces’ they had secretly got by heart and could interminably recite.... They not only popped out at me as tigers and as Romans, but as

## Shakespeareans, astronomers and navigators. (TS 193)

この彼らの高い演技と変装の才能は、クイントから受け継いだものと考えられる。クイントの幽霊を初めて目撃したヒロインは、彼が墮落しているだけでなく、「役者 (an actor)」(TS 173) のようだという印象を受けている。クイントは一見紳士の身なりをしているが、それは主人から盗んだ衣服だった。主人の服を着て、館の本物の主人のようにいぼりちらし、好き勝手に振る舞っていたクイントはまさに役者である。そして、子供たち、特にクイントと長い時間を過ごしたマイルズは彼の影響を受けて巧みに嘘と演技を重ねる。ある日、マイルズはヒロインに自分たちへの監視を緩めるように要求する。この時の彼は「率直さと自由の自然の創造物 (a small natural creature [of] all frankness and freedom)」(TS 230) ではなく、「才知に長けた、驚くべき小紳士 (a more ingenious, a more extraordinary little gentleman)」のようである。また、ヒロインが夜中に部屋を抜け出した理由をマイルズに問うと、彼は彼女に自分が悪い子だと思われてみたかったと告げる。これは一見子供らしい無邪気な言い訳に思えるが、実のところ「良い子」であるのもそうでないのも彼の演じ方次第であるという危険性を暗示している。湖畔でジェスルの幽霊と対峙したフローラもまた、幽霊が見えないふりをするばかりか、ヒロインにもそれが見えているかどうかを巧みな、何食わぬ顔で探る。このように、マイルズとフローラは理想の子供像が演技や嘘によって再現可能であることを示し、イデオロギーが説くミドルクラスの家庭像をゆさぶる。野蛮な動物、そしてその真逆位置する知識人の双方に扮することを得意とする二人の二面性は、徐々にその比率を反転させてヒロインを苦しめるのである。

## 二章：ガバネスの役割

19世紀の当時、ガバネスは貧しいミドルクラスの女性に開かれた数少ない職業の一つだった。これは働く場所が家庭中であり、また、仕事内容が育児や家事といったレディーの役割と同じであったことから彼女たちの品格 (gentility) が守られると考えられたためである。しかし、実際には彼女たちの社会的立場はきわめて曖昧だった。女性は男性家族に経済的に依存することが正しいとされたミドルクラス社会において、賃金労働をするガバネスはイレギュラーな存在だった。そのため、彼女たちは同じ階級の人間から侮蔑され、また、教養の無い他の労働者階級の従業員とも馴染むことができなかった (Tange 28)。社会の周縁者としてガバネスが周囲から無視される姿はシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847) やエミリー・ブロンテの『アグネス・グレイ』(1847)、ウィルキー・コリンズの『ノー・ネーム』(1862) などに見ることができる。『ネジの回転』のヒロインもまた、主人

公でありながら物語の当初は中心的な存在ではなく、観客的な立場にいる。ロマンスの主人公のようなマイルズとフローラに対して、ヒロインは自身が「哀れな女家庭教師 (poor protectress)」(TS 193) にすぎないことを自覚している。そのため彼女は彼らがショーを演じる間、「賞賛者 (an admirer)」(TS 180) に徹し、己の地味で目立たない社会的立場に甘んじようとする。<sup>2)</sup>しかし、『ねじの回転』のヒロインは無能な観客ではない。彼女は教え子たちによって演じられる家庭劇に違和感を覚え、その不自然さに疑問をもつ。やがてブライ館には「秘密 (a mystery)」(TS 166) があると確信した彼女は、館とその住人にまつわる謎を解き明かすために立ち上がる。このように、『ねじの回転』のヒロインはゴシック・ロマンスによって生み出された「動き、行動し、変化と冒険に対処する女性 (the woman who moves, who acts, who copes with vicissitude and adventure)」(Moers 127) なのである。

多くのゴシック・ロマンスの舞台がそうであるように、ブライ館はヒロインの「冒険心や決断力、創意、体力 (the heroine's enterprise, resolution, ingenuity, and physical strength)」(Moers 129) が試される場所となる。塔の上に立つクイントの姿を見たヒロインは驚愕と恐怖に襲われると同時に、「闖入者の侵入を受けた (we had been... subject to an intrusion)」(TS 167) ことに対する怒りと、それを許してしまったことに対する強い責任を感じている。この彼女の態度は戦うべき相手が幽霊であることを知った後も変わらない。次にクイントの幽霊が現れるのは、彼女が子供たちと教会に行く用意をしていたときである。食堂に忘れ物を取りに行った彼女は、クイントが外から窓に顔をはりつけ、部屋のなかを覗いているのを目撃する。彼女は一瞬息が止まるほどの恐怖に陥るものの、クイントが探しているのが子供たちであることに気が付くと、またたくまに外に出て彼が立っていた場所に向かう。すでに幽霊は消え失せていたが、この行動は彼女の勇気を証明するものだろう。ヒロインは幽霊たちとの遭遇を繰り返すうちに、ブライ邸における自身の役割が子供たちと幽霊たちを隔てる「スクリーン (a screen)」(TS 179) になることであることを確信するようになる。

この頃の私は、私にもたらされたヒロイズムの大いなる高揚に文字どおり喜びを感じていた。私は今や素晴らしく、困難な任務を要求された。他の大勢の娘たちが失敗したことに成功して、そしてそれを正しく見てもらえたら、ああ、なんて素晴らしいのだろう！（略）私は両親を奪われた世にも愛らしい子供たちを守り、庇うためにここへきたのだ。

I was in these days literally able to find a joy in the extraordinary flight of heroism the occasion demanded of me. I now saw that I had been asked for a service admirable and difficult; and there would be a greatness in letting it be seen—oh, in the right quarter! — that I could succeed where many another girl might have failed.... I was there to protect and defend the little creatures in the



world the most bereaved and the most loveable. (TS 179)

三度目の遭遇で、クイントは「生命をもった忌むべき危険な存在 (a living detestable dangerous presence)」(TS 195) として彼女の前に現れる。ある晩、ヒロインは階段を登ってくる彼の霊と鉢合わせる。しかし、今回彼女は恐怖を感じず、凜然と亡霊と対決する。亡霊もまた彼女が恐れていないことを察し、両者は長いこと睨み合う。最終的に幽霊はゆっくりと階段を降り始め、彼女はそれを追い払うことに成功する。このように、社会において目立たぬ日陰者であるヒロインはゴシック・ヒロインとしての頭角を現し、家庭を守る守護者になろうとするのである。

こうした家庭の安寧を守ろうとするゴシック・ヒロインたちの勇気や献身は、物語のなかで時に幸福なエンディングを彼女たちに約束してきた。*Gothic Forms of Feminine Fiction* のなかで Susanne Becker は、崩壊した屋敷に招かれた貧しいガバナースやコンパニオン (レディーの付添い人) に期待されるのは、女性に伝統的に課されてきた「妻 (wife)」, 「母 (mother)」, 「家政婦 (homemaker)」の役割を遂行することであるとし、試練を乗り越えたヒロインたちが主人に見初められ幸福な結婚を得るプロットを『ジェイン・エア』, ダフニ・デュ・モーリエの『レベッカ』(1938), ヴィクトリア・ホルトの『琥珀色の瞳の家庭教師』(1960) の流れのなかに指摘している (Becker 85)。良妻賢母になれる素質をもつ女性だけがミドルクラス社会に復帰することを許されるこうしたプロットは、言ってしまうと当時の社会を支えるジェンダー・イデオロギーを正当化するものであろう。

『ねじの回転』でも、ヒロインは秘かに主人に恋心を抱いている。彼女は主人に対する思慕から奇妙な仕事を引き受け、幽霊から子供たちを守ることで示される自身の「思慮分別、静かな良識、上品な嗜み (my discretion, my quiet good sense and general high propriety)」(TS 163) が主人に認められることを期待する。しかし、作者はこの物語がラブロマンスにはならないことを冒頭ではっきりと述べる。ヒロインの原稿を持ってきたダグラスは彼女がロンドンの面接で会ったとき、二度と主人に会わなかったことについて言及する。このため、ブライ館におけるヒロインの献身はあくまで人知れないものになっている。

『ねじの回転』では良妻賢母の女性を褒め称えるのではなく、むしろそうした役割が押し付けられた女性の苦しみを描くことで、従来のジェンダー・ルールに疑問が提示されている。館でただ一人幽霊が見えることを公言し、子供たちを守ろうと奔走するヒロインは、ともすれば彼女の方が狂っていると見なされてしまう。他の従業員たちは現在の館の最高権力者である彼女に従順だが、しばしばその突飛な行動に困惑している。また、家政婦頭であるグロース夫人はヒロインと姉妹のような友情を結ぶものの、夫人は「想像力が欠如 (a want of imagination)」(TS 202) しており、気が弱いために幽霊の存在も信じたがらない。さらに

夫人は字を読むことができず、教養も劣るためにヒロインの話を完全に理解することができない。このためヒロインは常に孤独な立場に置かれている。

また、時に彼女の精神は守るべき子供たちによって追い詰められる。ある日、グロース夫人といなくなったフローラを探していたヒロインは、彼女が湖水を挟んで再びジェスルの幽霊と対峙しているのを発見する。これまで子供たちへの影響を考え、直接言及することを避けてきたヒロインはここでついにジェスルについてフローラを詰問する。しかし、フローラは幽霊が見えずに混乱しているグロース婦人を仲間に引き入れると、ヒロインに激しい罵声を浴びせて大泣きする。この時のフローラは「子供ではなく、老女 (she's not a child: she's an old, old woman)」(TS 235) のように狡猾で、きつい顔でヒロインのことを睨みつける。グロース夫人がフローラを庇うように抱きしめたのを見たヒロインは、自身の敗北を認め、「私は全力を尽くしたけれど、ついにあなたを失ってしまった。さようなら (I've done my best, but I've lost you. Good-bye.)」(TS 241) と告げる。その晩、フローラは突然の高熱を出し、グロース夫人と共にロンドンの主人の屋敷に送り出される。このように、ヒロインは結局、自身を患わずなと言っていた主人の意に沿うことができず、ガバナスの任を全うすることができない。一連の出来事は「迷信や恐怖を助長する若い世話係りの犯罪行為 (the criminality of those caretakers of the young who minister to superstitions and fears)」(TS 204) とも捉えられかねないのである。

しかし、幽霊をヒロインの妄想として片付けるには不自然な部分が多く残される。ヒロインはグロース夫人から話を聞く前からクイントとジェスルの容貌を言い当てた。また、お喋りなはずの子供たちは不自然なことに二人のことを一切口にしない。また、グロース夫人も幽霊が見えていないにも関わらず、館によくないことが起こっているのを感じ取り、マイルズとフローラが小さな子供ではとても思いつかないことをしばしば口にするのを懸念している。幽霊の出現と共に起きる気温の低下や大地の振動といった超常現象に子供たちも反応しており、全てがガバナスの妄想とは考えにくい。

グロース夫人は最終的にヒロインの判断を信じ、フローラを連れて館を去る。そして、残されたヒロインはマイルズを狙うクイントと最後の対決をする。対決の日、彼女は他の従業員たちに尊大な態度をとる。

その朝、私はとても尊大でドライな態度になった。私は自分がたくさんの責任を負っていることを喜んで意識し、自分がそんな状態に残されても毅然としていることをはっきり周囲に知らせた。(略) 家の者に私の築いた高い地位をはっきりと示すために、私は食事をマイルズと一緒に階下 (私たちはそう呼んでいた) で取ると命じた。

I became that morning very grand and very dry. I welcomed the consciousness that I was charged

with much to do, and I caused it to be known as well that, left thus to myself, I was quite remarkable firm.... To mark, for the house, the high state I cultivated I decreed that my meals with the boy should be served, as we called it, downstairs. (TS 249–250)

これは、グロース夫人が去ったことに動揺する従業員たちを諫めるためのものであるが、同時に彼女が館と住人を守る一家の主になった表れである。マイルズが何かを打ち明けようとしているのを察知した彼女は、食事のあと彼と対峙する。しかし、舌戦にもつれこんだ二人は再びクイントの襲撃を受ける。幽霊は食堂の窓ガラスにぴったり身体をつけると、「牢獄の見張り (a sentinel before a prison)」(TS 257) のような顔で部屋の中を睨み付ける。ヒロインはとっさにマイルズを庇い、彼が亡霊を見ないように彼の背中を窓に向ける形で彼を抱きしめる。とうとうマイルズは彼と妹が不自然に避けてきたクイントとジェスルの名前を挙げ、彼らが今ここに来ているのかとヒロインに問う。ヒロインは自身の勝利を確信し、いっそう強く彼を抱きしめる。やがて亡霊は姿を消し、彼女はマイルズの体を離す。しかし、腕の中に抱いていたマイルズの心臓はとまっていた。

## おわりに

『ねじの回転』の物語はマイルズの死をもって唐突に終わる。結局幽霊の正体は何だったのか、そもそもクイントやジェスルによる悪徳行為は本当にあったのか、マイルズの死因もフローラのその後も語られず、全ての謎は解けないまま物語は幕を閉じる。しかし、ゴシック・ロマンスに影響を受けた超自然現象の描写もさることながら、『ねじの回転』がその中心に描くのは、当時のミドルクラスが理想とした家庭像の崩壊である。ブライ館には家族を守るべき家長が不在である。マイルズとフローラの伯父はおそらく何らかの事情を知っていただろうにも関わらず、全ての責任をガバナスに一任した。純粹だと思われた子供が悪徳に染まった経緯も、元をたどれば彼がクイントの背景をよく調べもせずに、彼に館の管理を丸投げしたことにある。『ねじの回転』で、本来ミドルクラスの家庭においてイレギュラーな存在であるガバナスが一家の平和を守ろうと奮闘する姿は、理想だけが先走る家庭のイデオロギーの欺瞞を浮き彫りにする。館のなかでヒロインだけが演じられる家庭劇の不自然さに気が付く。彼女は相手が人間であれ幽霊であれ、家庭の美德を傷付けようとするものを排除するために家の中心的な役割を引き受ける。最終的に彼女は子供一人を死なせてしまう大事件を起こすものの、その後、ダグラスの妹の家庭教師として雇われていることや、初老になるまで長生きしていることを考慮すると、作者は彼女の狂気を疑うよりも彼女の行為に一定の評価を与えているといえるだろう。本書が屋敷を浄化する女性とその主人のロマンスを描

く伝統的なゴシック・ロマンスとは異なるエンディングを迎えるのも、作者が家庭の概念が女性に押し付ける役割を皮肉っているようである。

## 注

- 1) 『ねじの回転』のヒロインは名前が与えられていない。そのため、本論では「ヒロイン」、または「彼女」の表記を用いる。
- 2) 主役であるにも関わらず、『ねじの回転』のヒロインに名前が与えられていないこともまた、社会的に居場所のない彼女の立場の弱さを示すものと考えられる。財産や家族を失うことで社会的に名無し (no name) となるミドルクラスの娘たちの姿はコリンズの『ノー・ネーム』にも見ることができる。

## テキスト

James, Henry. *The Turn of the Screw and The Aspern Papers*. Hertfordshire: Wordsworth, 1991. Print.

## 引用・参考文献

- Becker, Susanne. *Gothic Forms of Feminine Fictions*. New York: Manchester UP, 1999. Print.
- Beidler, Peter G. *Ghosts, Demons, and Henry James: The Turn of the Screw at the Turn of the Century*. Columbia: U of Missouri P, 1989. Print.
- Briefel, Aviva. "Specters of Responsibility: Victorian Horrors in *The Turn of the Screw* and *Psycho*" in *The Men Who Knew Too Much: Henry James and Alfred Hitchcock*. Eds. Susan M. Griffin and Alan Nadel. Oxford: Oxford UP, 2012. 159–173. Print.
- Despotopoulou, Anna and Kimberly C. Reed. *Henry James and the Supernatural*. New York: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Gentile, Kathy Justice. "John Marcher's Uncanny Unmanning in 'The Beast in the Jungle'" in *Henry James and the Supernatural*. Eds. Anna Despotopoulou and Kimberly C. Reed. New York: Palgrave Macmillan, 2011. 97–111. Print.
- James, Allison and Adrian L. James. *Constructing Childhood*. New York: Macmillan, 2004. Print.
- Lynch, Eve M. "Spectral Politics: The Victorian Ghost Story and the Domestic Servant" in *The Victorian Supernatural*. Eds. Nicola Bown, Carolyn Burdett, and Pamela Thurschwell. Cambridge: Cambridge UP, 2004. Print.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Oxford UP, 1977. Print.
- Mussell, Kay. *Fantasy and Reconciliation: Contemporary Formulas of Women's Romance Fiction*. Westport, CT: Greenwood P, 1984. Print.
- Tange, Andrea Kastan. *Architectural Identities: Domesticity, Literature, and the Victorian Middle Class*. Toronto: U of Toronto P, 2010. Print.